

国分寺駅南口の物語 第1回

かがやきとこぼれ落ちるもの

地域連携センター 笹川 克也

JR国分寺駅南口ロータリー前にたたずむ母子像。

生まれたばかりの赤ん坊を母親が胸のところまで掲げ、少女が高く手を伸ばしてその子を押し上げている姿は誕生と希望の象徴に見えます。

彫刻家・松村節三の手による像の名は「かがやき」。



2023(令和5)年のJR国分寺駅南口(「かがやき」像)

台座には、「国分寺駅の改良・自由通路の新設を機に歴史と変化の街国分寺市のさらなる発展を祈念し関係各位の尽力によって建立されたものである」(国分寺市長 本田良雄 筆 平成元年2月28日)とあります。

1988(昭和63)年12月1日の駅舎の建て替え完了と南北連絡通路開通、特別快速電車の停車(2面4線化)、それに続く翌1989(平成元)年3月1日の駅ビル(国分寺エル)竣工という、国分寺にとっての悲願の実現がこのようなかたちであらわされたのです。駅ビルが完成した1989年は、JR中央線の前身である甲武鉄道が開業してからちょうど100年にあたる年でした。

甲武鉄道が1898(明治31)年に新宿から立川まで開業したときに開設された駅は、新宿、中野、境(現在の武蔵境)、国分寺、立川の5駅で、この年には国分寺村も誕生しています。

国分寺駅は開設当初は北口しか改札がなく、南口ができたのは甲武鉄道開業から半世紀以上が過ぎた1956（昭和31）年でした。ちなみに、立川や境（武蔵境）も国分寺と同様に開業当初は北口改札のみだったので駅の南北の発展の違いが現在でもはっきりとわかります。

国分寺駅南口ができてから5年後の1961（昭和36）年、武蔵野美術大学で教えることになり港区三田から府中市新町に転居した民俗学者の宮本常一さんは、その頃の南口の様子についてこのように書いています。

「話をきめて、娘をつれてその家を見せにいったら娘が『こんなに遠いところなの』と涙をおとした。国分寺の駅から私の家まで近道を通ると途中にほとんど家はなかった」（『私の日本地図⑩ 武蔵野・青梅』2008年 未来社）

国分寺駅南口を利用する人々にとって、南北連絡通路が開通し駅ビルができたということは大げさではなく30年来の悲願だったのです。

細い跨線橋しかなかった1988年までは、南口駅前から北口駅前に急いで行こうとするときには、入場券を買って南口改札から駅構内に入り北口改札から出るしか方法はありませんでした。通常は東側の国分寺街道まで行き殿ヶ谷戸立体のゲートをくぐるか、西側の花沢橋陸橋を渡るといった、いずれの場合も遠回りを強いられた南口利用者のなかには、国分寺の「南北問題」という言い方をする人たちもいたほどです。



1986(昭和 61)年頃の国鉄国分寺駅南口の様子

しかし、駅ビルや連絡通路ができたことによって失われたものもありました。それは南口を利用していた若者たちの居場所です。

他の中央線沿線のまちにくらべて駅から近くても不便なので家賃が安い国分寺駅南口には、1960年代から若い人たちが多く住むようになりました。このため、飲食店などのお店も出しやすかったのですが、その状況が90年代に急速に変わっていったのです。

70年代、南口には、お金はないけれどもアイデアのある若者たちが自然と集まり魅力のある店を出すような状況が生まれました。その中には村上春樹さんが作家になる前に経営していた「ピーターキャット」(ジャズ喫茶 国分寺時代は1974～1977年 その後千駄ヶ谷に移転)もありました。とりわけ、酒を出すスナックなどの楽しい店がいくつもあった国分寺街道沿いは、店をはしごすると日付が変わってしまうことがよくあるために「夜更かし通り」と呼ばれていたようです。

80年代になっても店を続けていた、「寺珈屋」(喫茶店)、「ぶりきかん」(喫茶店)、「たらまんか」(喫茶店)といった、南口の若者たちの居場所だった居心地の良い店は、90年代に入ると次々となくなってゆきます。

このような状況を、1977年から「ほんやら洞」の経営者となったシンガーソングライターの中山ラビさんはこう書いています。

「88年、駅ビルができるまで中央線は38度線。国分寺は南北に完全に分断されていた。賑わう北、駅前に庭園があり人影もまばらな南。～中略～ 寺子屋、ぶりきかん、たらまんか…次々と消えた。無機質なカフェが次々と生まれ、色濃いユニークな喫茶店は取り残されていった」(『たまら・び 83』2014年 けやき出版)

90年代を何とかやり過ごし、70年代(という時代そのもの)の雰囲気を保ち続けていた南口の飲食店も、21世紀に入ると「カレーと民芸の店グルマン」、定食「赤城」などが次々と店を閉め、2024年現在では「ほんやら洞」と「ピーナッツハウス」が残っているだけです。

60年代後半、国分寺にいた「部族」と名乗るヒッピーたちが生活の手段であると同時に自分たちの居場所として作った「ほら貝」という店から始まった、国分寺の(そして中央線沿線の)サブカルチャー、カウンターカルチャーを体現する店の系譜は、21世紀初頭にはこぼれ落ちてゆくように跡形もなく消え去ってしまう。それは、2008年の「ほら貝」閉店に象徴されるのではないかとそのころ私は考えていました。

しかし、不思議なことに、「ほら貝」が閉店した2008年頃を境に、新たなそして大きな動きが国分寺に生まれます。

それは3つのカフェの誕生（と移転）から始まったのです。

- ・2008年 カフェスロ―国分寺移転（2001年に国分寺と府中の間に開店）
- ・2008年 クルミドコーヒー開店
- ・2009年 おたカフェ開店

<続く>